

Title	リカルドオの機械論
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.12 (1921. 12) ,p.1555(1)- 1585(31)
JaLC DOI	10.14991/001.19211200-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

定價六圓八十錢
送料十八錢

明快、著者の學問的良心隨處に迸發して痛切を極む。

蘇西亞の歴史は深刻なる階級争鬭の歴史なり。本書は筆を古代スラブの自由社會に起し、海賊種ノルマン人統治下の奴隸經濟、蒙古族モスカウ朝の擄取政策、ロマノフ朝の悽慘たる農奴制度、十九世紀後半より今世紀に亘る資本主義の澎湃たる波濤を描きて露西亞革命の必然的行程を道破す。涉獵數十書論斷

定價六圓五十錢
送料十八錢
同前

目要

序説 近代開題總説 第一編 古代哲學：プラトーン・アリストートル・ストア及びエビクロス派哲學者：基督教 第二編 近世哲學（其一）自然法：グロチウスの先驅者：グロチウス・ホツプス・ハリングストン・ロック・デビッド・ヒュム・重商主義及び重農主義者：アダム・スミス：自然權及び自然法 第三編 近代哲學（其二）功利派經濟學：マサニョ・重商主義及び重農主義者：ミル・ジョン・スチュアート・ミル 第四編 近代哲學（其三）理想派經濟學：カール・ファイヒテ・クラウゼンベル 第五編 近代哲學（其四）唯物派經濟學及び近代哲學（其五）進化哲學：カール・マルクス

八・一六三三(京東) 振替
 五・五一七二(阪大)

大 燈 閣

株式會社 大燈閣

東京區橋本町 大
 大阪區南區三休橋

論說

リカルドオの機械論

小泉信三

()

Ricardo は其賃銀論に於て勞働の供給たる人口と之に對する需要たる資本量とを相對峙せしめ、勞働者が現實に受くるところの賃銀即ち勞働の市價は、此兩者の關係によりて定めらるゝ事を説けり。然るに生活に餘裕の存する限り人口は必ず常に増加するを以て、現實賃銀一度勞働者の生活必要費以上に昇るときは、人口の増加促進せられて必ず之を其舊率まで下降せしむるの作用をなさずんば已ま

リカルド水の機械論

2000

す。たと資本の蓄積絶えず速かに行はれて、人口の増加の勢是に追及すると能はざるときは、労働者の生活は能く久しきに亘りて餘裕ある事を得べしと雖も、Ricardoが見るところに従へば、資本の蓄積は資本の蓄積其者を阻止するの原因を中に包藏す。蓋し資本の蓄積は現在人口の欲望を充足したる後に残る餘剰生産物に就て行はるゝものなるが、此の餘剰生産物の大小は労働の生産力の大小によりて決せられ、労働生産力の大小は更に肥沃なる土地の豊富なる否とによりて決せらる。然るに資本の蓄積に由て促がされたる人口の増加は、早晩地力劣れる土地を耕作するの已み難きに至らしめ、而して劣等地の耕作は、即ち労働生産力の減退に外ならざるを以て、茲に資本の蓄積の勢は阻害せられざる事能はざるに至る。即ち資本の蓄積の勢は、必ず早晩人口増加の勢の追及するところたらざること能はざるものなり。労働の市價が之に歸着せんとするところのその自然價格は、労働者及び其家族の習慣上必要なる (essential to him from habit) 生活費の義なるを以て、Ricardoは決して労働者が常に極貧の境界に沈淪すべきことを豫言したるに非ずと雖も、社會の進歩人口の増加に連れて労働需要を決すべき資本蓄積の勢は漸

く遲緩とならざる事能はずとせば、労働者は結局餘裕ある生活を營むこと能はざる約束を有するものなり。此事既に労働者の爲めに前途の期望を陰翳ならしむるに足れり。然るに Principles 第三版(一八二一年)に至りて始めて挿入せられたる機械論の一章(第卅一章)に於て Ricardo は舊説を改め、機械採用の爲め資本の増加は必しも同比率に於て労働に對する需要の増加を意味せず、之が爲めに過剰人口造り出されて労働者の窮厄貧困に陥るべき事に着目して其學說の悲觀的色調を一層濃厚ならしむるに至れり。

(II)

機械の採用に由りて排除せらるゝ労働量(労働者數の、機械製造の爲めに要する労働量よりも大なることは Ricardo の當初より認むるところなり。即ち彼は Principles 第一版の價值論中に一例を設けて、大要左の如き事を記せり。

一帽子製造者ありて一百人の労働者を雇傭し、其賃銀は一人年額五十磅にして、その生産するところの貨物の價值は八千磅なり。今一機械ありて正に一年間の使用に堪え、正に百人の労働と同一の作業をなし、而して其價值は右の賃銀總額と

等しき五千磅なりとせば、製造家に取りては機械を買ひて生産を行ふも、或は從來の如く一百人を雇傭するも全然得失するところなし。然るに今賃銀率騰貴すること一割なる爲め同量の労働を雇傭する爲めには更に五百磅の追加資本を要するに、造るところの貨物は依然八千磅に賣らるゝとせば、此人は機械を買ふに躊躇せざるべく、苟も賃銀額にして始めの五千磅以上に停まる限りは年々此事を繼續すべし。然るに問題は機械の果して舊價格を以て買ふこと得べきや否や、賃銀騰貴の爲め機械の價格も亦騰貴することなきや否や是なり。若し機械の製作に資本の投せらるゝことなく、その製作者に利潤の支拂はるゝことなくば價格は騰貴すべし。假に機械は一百人一年間の労働に依て造られ、一人の賃銀五十磅にして機械價格は五千磅なりしならんには、賃銀五十五磅に騰貴せば、其價格も五千五百磅なるべしと雖も、事實は然らず。機械價格の五千磅ならんが爲めには、製作に従事せる労働者は百人以下ならざる可からず。蓋し此五千磅には労働者を雇傭せる資本の利潤をも含めるを以てなり。假に八十五人の労働者が年々四千二百五十磅の費用を以て雇傭せられ、五千磅より此金額を控除せる殘額七百十磅は機械

製作家の資本に對する利潤を構成するものなりとせよ。今賃銀一割騰貴するときは、彼れは四千六百七十五磅を支出すべく、若し機械にして依然五千磅に賣らるゝとせば、その受くるところの利潤は三百二十五磅に過ぎざるべし。而して事實上是は凡ての製造家資本家の遭遇するところなるなり。賃銀の騰貴は凡ての者に影響す。故に若し機械製造者にして賃銀騰貴の爲め機械の價格を引上げべしとせば、その價格の再び引下げられて普通利潤を生ずるに過ぎざるに至る迄異常の資本量は此機械製造業に投せらるべし。今機械を採用せる帽子製造家が其生産物を八千磅に賣るときは、前と正に同一の状態に在るべく、其の投するところの資本は増加せずして前と同一の利潤を收む。然れども産業上の競争は久しく此状態の存續するを許さざるべし。蓋し資本は最有利の用途に流入すべきを以て、彼は帽子の價格を其の收むるところの利潤が一般率に下降するに至る迄引下ぐることを餘儀なくせしめらるべきを以てなり。斯の如くにして社會は機械の爲めに利益を受く。是等無言の作業者(mute agents)はその排除するところの労働と貨幣價值を同ふする場合に於ても、常に之よりは遙かに少なき労働の生産物たるな

り(pp. 38-41)

即ちRicardoは機械採用の爲めに人間労働の一部分が不用となることは之を認めたり。然れども彼れは斯の如くにして職を離れたる労働者は容易に他に職を求むることを得べく、究極機械採用の前と後とに於て需要せらるゝ労働量には増減なく、労働者も亦地主資本家と共に機械の發明に由る物價低落の恩澤に浴するの利益のみありて、失ふところなしと認めたるが如し。彼れが自ら告白するところを引用すれば、始めて經濟學上の諸問題に注意するに至りし時以來常に彼れの意見は、労働節約の効果あるべき機械の一生産部門に於ける應用は、一般の利益たるものにして、之に伴ふところの不利は、多くの場合に於て労働及び資本を一用途より他用途に移轉するに伴ふところの不利に過ぎずと謂ふに在りき。…地主にして同額の貨幣地代を收得せば、之を支出して買ふべき貨物の或物の價格低落に依て利益すべく、而して此の價格低落は、機械使用の結果として起るべきこと必定なり。資本家も亦た同様にして利益を受くべし。機械を發明し之を始めて利用したるものは、暫らく特別の巨利を博すべしと雖も、機械の使用普及するに連れ、産

出貨物の價格は競争の結果その生産費まで下降し、其曉資本家は舊と等しき貨幣利潤を收め、僅かに消費者として同額貨幣收入を以て購入し得る貨物量増加するの一般的利益に均霑するに過ぎざるべし。而して労働者階級の利害に就ては彼れ以爲らく、労働者の階級も亦た同額貨幣賃銀を以て更に多量の貨物を購ふ力を有すべきを以て機械の使用に依て同じく利益するものなりと。而して彼は、資本家は前と同量の労働——或は資本家は之れを新貨物又は少くも他貨物の生産上に投ずるを餘儀なくせらるゝ事あるべしと雖も——を需要雇傭するの力を有すべきを以て何等賃銀の低減行はれざるべしと思へるなり。蓋し始めRicardoの見たる所に従へば、一生産業に新機械應用せられたる爲め生産額増加し、而して生産物に對する需要は是と歩を共にせざるべきは労働者の一部分は必然其生産業より解傭せられざる事を得ずと雖も、彼等を雇傭したる資本は依然として存し、且つ之を有するものは之を生産的に利用することを利益となすを以て、此資本は社會に有益にして、需要あること必定なる或る他の貨物の生産に投せらるべきを以てなり。(Principles, 3rd. ed. pp. 46-8) 現に一八二〇年一月 Mac Culloch が Edinburgh

Review に對する寄稿 “Taxation and the Corn Laws” に於て「機械に投せられたる固定資本は常に必ず之よりも著しく大なる流動資本量を排除せざるを得ず——若し然らずんば機械を設置すべき理由なきを以てなり。故に其の第一の效果は賃銀率を騰貴せしむるよりも寧ろ下降せしむるに在り」と謂ふや、Ricardo は之を非とし、MacCulloch に與へたる書中に記して「機械の使用は、予は信ず、決して勞働に對する需要を減少せしむるとなきを。これは決して勞働價格下降の原因たらずして、その結果たるものなり。若し或人蒸汽機關を用ふるは人間勞働を雇傭するよりも正に少しく低廉なるの故を以て之を設置し、而して其結果として勞働價格の減少起らば、他の何人も機械の使用を擇ぶことを利とせざるべし」と謂へるなり (Letters of Ricardo to MacCulloch & note p. 57)。

(III)

上記 Ricardo 當初の意見は、その地主及び資本家の境遇に關する限りに於ては遂に變易することなかりしが、勞働者に關する部分は熟考を重ねたる結果謬見として之を放棄するに至れり。彼れは機械の人間勞働代用が、屢々勞働階級の爲めに

甚だ有害なることを認むるに至れるなり。彼れの前日の謬見はその自ら記するところに從へば、社會の純所得と總所得との關係に關する誤解より生じたり。彼れは社會の總所得の増加は、その純所得の増加と並行し、從て地主資本家が所得の源泉たる基金 fund と勞働者が所得を仰ぐところの基金とは同時に増加するものと思ひたるも、今地主資本家の爲めの基金が増加すると同時に勞働者の爲めの基金の減少することあり得べきを認めたるなり。彼れは一例を設けて機械使用の爲めに勞働が不用となるの理を説明す。一資本家あり、二萬磅の價值ある資本を以て農業と生活必需品の製造とを兼ね營み、資本中の七千磅を固定資本即ち建物道具其他に投じ、残る一萬三千磅を流動資本として使用して勞働維持(雇傭)の用に充て、而して利潤率は一割にして、資本家は年々二千磅の利潤を收むるものと假定すべし。資本家は年々一萬三千磅の價值ある食物及び必需品(即ち流動資本)を以て生産を開始し、一年中に之を同額の貨幣に對して自家雇傭の勞働者に賣却し、又同期間に同額の貨幣を賃銀として勞働者に支給す。勞働者は一年中に一萬五千磅の價值ある食物並に必需品を生産して資本家の手中に復歸せしめ、資本家はその

中の二千磅を隨意處分す。此場合此年の總收益は一萬五千磅純收益は二千磅なり。然るに今年に於て資本家は一萬三千磅を支出し労働者の半數を役して機械を製作せしめ、残る半數を舊の如く食物並に必需品の生産に充てたりとせば、如何なる結果を生ずべきか。此年に於て生産せらるゝものは七千五百磅の價值ある機械と、同じく七千五百磅の食物並に必需品となるべく從て資本家の資本は舊に同じかるべし。蓋し資本家は此の二個の價值額の外に七千磅の固定資本を有すべく、之を總計すれば資本二萬磅と利潤二千磅とを成すを以てなり。今此の二千磅を自家消費の爲め控除するときは、資本家の流動資本の以て次年の活動を營むべきものは五千五百磅に過ぎざるべし。即ち彼れの労働雇傭資力は一萬三千對五千五百の比を以て減少すべく、從來七千五百磅を以て雇傭せられたる労働は全部過剰となるべし。但し此場合資本家は機械の援助により前より少なき労働を以て流動資本を回收すると共に全資本に對する二千磅の利潤を挙げざる可からずと雖も、苟も此事にして行はるゝを得んか、總所得の幾許なるかは全く其の間ふところにあらず。而かも人口を養ひ労働を雇傭するの力は、一國純收益によら

ずして常に其總收益に由るものなるを以て、上記の如く機械採用の爲めに總所得減少するときは、人口は過剰となるべく、労働階級は窮迫困難の狀態に陥ることを避く可からざるなり。(pp. 468-471)

固より機械の使用に基づく物價の低落は資本家の貯蓄餘力を大ならしめ、斯くして増殖せる資本は對労働需要を増加せしめ、從て一度職を離れたる者の一部が後に至つて雇傭せられ、或は往々にして純收益の増加が優に總收益の減少を償ひて、人口過剰を生ぜずして終ることあるは Ricardo 之を認むと雖も、(pp. 471-2) 而かも究極彼れは労働階級が懷ける、機械の使用は屢々彼等の利益を傷くとの意見は「成心誤謬に基づけるものにあらずして、よく經濟學の正當原理に適へるものなる」(p. 474) 事を明言して憚らざるものなり。

以上 Ricardo は説明の爲め姑らく新機械が突然發明採用せられたるものと假想したれども、彼れの所見に従へば、事實上機械の發明は既存資本を其現用途より他に轉せしむるよりは、寧ろ節約貯蓄せられたる新資本の用途を決するの作用をなすものなりと謂ふ。資本家を促がして機械採用を決せしむるものは、賃銀の騰貴

なり。即ち資本並に人口の増加の爲め食物の生産益々困難となりて、其價格騰貴し、從て賃銀漸く騰貴するに及び貯蓄せられたる新資本の機械に投せらるゝ部分の比例は増大す。彼はこれが爲めに資本の増加が遂に全く勞働に對する需要の増加を伴はざるに至ることあるべしと想像することゝ雖も、敢て「勞働に對する需要は……資本増加の比率に於てせず、比率は必然減少すべし」と謂ふものなり。(p. 479)

(四)

McCulloch は固より此 Ricardo の變説に平なること能はず、書を寄せて師の新見解を難じ、之を以て經濟學を基礎なき殿堂と評するものに新論據を與ふるものとなし、又 Malthus 氏の論に對する貴下の得意の答辯を讀みたる後、貴下が斯く速かに氏と握手して一切を拋棄すべしとは豫期せざりしところなりと謂へり。是に對する返書中に於て Ricardo は再び自説を説明して曰く、予が意見の變化の全部は單に次の如し。曰く、予は從來機械は、一國をして年々其貨物の總生産額を増加するとを得しむと思へり、而して今は其使用が寧ろ總生産額を減少せしむるの傾ある事

を信ずる事はなり。Malthus の意見に關して辯じては、貴下 (McCulloch) は必ず Malthus 氏の機械に對する反對論が、その一國總生産額を増加せしめて、生産せられたる貨物を消費する事能はざるに至らしむること、是に對する必要なに至らしむることとに在るを忘れたるならん。之に反して予が見解は、機械の使用が屢々總生産額を減少せしめ、消費慾は無制限なるも需要は購買資力欠乏の爲めに減少すべしと謂ふに在り。凡そ二學説のこれよりも相異なるものあり得べきや。」と謂ひ、更に進んで次の如く謂へり。曰く、予は機械が貨物をその設置前に於けるより低廉に生産することなくんば、設置せらるゝ事なかるべきことを認むと雖も、之を低廉に生産せば、其設置は必ず各階級の人に有利ならざる可からずと云ふを否認す。其設置は購買者の各階級に取りて購買者としては必ず有利ならざるを得ずと雖も、吾人の間に於ける問題は、その果して購買者階級の數を減少せしむるや否や是なり。予がその減少せしむべしと謂ふは、その總生産物量を減少せしむるを以てなり。從て君が書中に總生産若しくは純生産額の大小は吾人の毫も拘はるところにあらずと謂へるは根據あること能はず、全問題は懸りて此命題の眞偽に在るを

以てなり。君若し交換し得べき物品を減少せば、君は亦貨物に對する需要をも減少せしむ。社會の或る一若しくは許多階級の享樂資料を減少せしむるなり。予が機械が果して一年の用に耐ふるか、十年百年の用に耐ふるかを言はざりしとせば、予は當然なすべき明言を怠れるものなり。又予は機械が使用に耐ふること僅かに一年に過ぎざるときは、全く勞働に對する需要の減退なしと云ふ事の幾何學上の命題の如く明白なるを認むと雖も、機械が十年の用に耐ふるも猶ほ必ず同一の結果あるべしと云ふ事を容認せず。機械にして僅かに一年の用に耐ふべしとせば、生産せられたる羅紗は少くも前と同じ價值を有せざる可からずと雖も、若し十年持續すべしとせば、これよりも遙かに小なる價值は資本の普通利潤を生ずるに足るべし。何となれば同額の資本は投せらるべしと雖も、其資本中勞働維持の用に充てらるゝものは少なく、從て生産せられたる貨物の總價值より年々控除せらるゝところ減少すべきを以てなり。常に利潤を構成するものは、此控除の跡に残るところのものなり。一製布家ありて一ヤアド二磅にて羅紗一萬ヤアド、即ち二萬磅を生産し、其中九千ヤアド即ち一萬八千磅を勞働に支給す。機械の助力に

依り同一額の資本を以て彼れは年々僅かに三千ヤアドを生産し得るに過ぎず。然れども此の三千ヤアドの中彼れは得たる利潤として一千五百ヤアドを留保することを得、而して生産手段節約によりて羅紗は一ヤアド一磅十志に下落するものと假定すべし。今製布家は同額の資本に對し、前に得たる二千磅の代りに二百五十磅を得ることなきか。彼れが爲めには固定資本を以て流動資本に代ふる充分の理由なきか、而して勞働を排除することなくして能く之を行ふことを得るか。故に吾人は茲に一貨物が其總量は減少せるにも拘らず、生産費減少の爲め低廉となる一例を有するなり。更に此機械の耐久力を増大せんか、彼れはその固定資本の原狀を維持せんが爲め投せざる可からざるヤアド數減少するを以て、三千ヤアドより少なき収益は以て製布家を償ふに足るべし。若し増大せる耐久力を以て機械が依然羅紗三千ヤアドを生産すと假定せば、羅紗の價格は低落すべし。蓋し其生産費更に減少すべきを以てなり。君が同量の勞働を雇用し得るは、機械が羅紗三千ヤアドを生産する場合に於てのみ。蓋し此場合に於てのみ君は年々食物羅紗及び有ゆる他の貨物の同一量を有すべきを以てなり。……一製造家流

動資本を有するときは彼は之を以て更に多數の人を雇傭することを得べし。而して彼若し此流動資本に代ふるに同價值の固定資本を以てすることを適宜とせば、必ずその勞働者の一部を解雇するの必要を生ずべし。蓋し固定資本はそれに取て代らんことを目的とせる勞働の全部を雇傭すること能はざるを以てなり。予は告白す、是等の眞理は予の見るところを以てすれば幾何學上の眞理の如く明白にして、たゞ予の久しく之を認むること能はざりしを驚くのみなることを。請ふ成心を去りて之に注意せよ。然らば予は必ず君の予に同意すべきを信ず。」と (Letters to McCulloch pp. 105-9)

Ricardo お Malthus に與へたる書簡中にも此事に言及し「吾等 (McCulloch と Ricardo と) の間に二三通の書簡交換せられしが、最後の書に於て彼れ (McCulloch) は機械使用の結果の一年の總生産量とその價值とを減少せしむることあり得べきことを承認したるが如し。此點を讓歩することに依て彼れは問題を放棄せるものなり。何となれば減少せる總生産物量を以てして同一の勞働雇傭資力あるべしと主張すること不可能なるを以てなり。予を以て見れば此問題に關する予の說の眞な

る事は絶對的に明白なるの觀あり」と記す (Letters to Malthus p. 184—Letters to McCulloch pp. 113-4) McCulloch も後に「機械に關して Ricardo 氏が假想せる場合」の「ありぐあひ」を得を認むるに至れり。 (Principles of Political Economy 1825 p. 165)

(五)

Ricardo をして說を改むるに至らしめたるものは、恐らくその機械論中に引用せる John Barton の小冊 Observations on the Circumstances which influence the Condition of the Labouring Classes of Society, 1817 年と謂ふ。 (Diehl, Erläuterungen, II, 425—Marx, Theorien über Mehrwert II. Bd. II. Teil S. 352) Barton は資本中の賃銀支拂の用に充てらるゝと然らざる部分とを別ちて、資本の増加が必しも勞働に對する需要の増加を意味するものにあらざることを指摘したるの「大功績を有す」(Marx)。これより先き Adam Smith は其賃銀論の章に於ては一般に「賃銀に依て生活するものに對する需要」は「賃銀支拂の用に充てられたる基金」の増減に由りて増減し、而して此基金は生活維持に必要なる以上の餘剰所得及び手工業者 (masters) の業務の必要を超過する餘剰資本 (stock) を以て構成せらる。即ち所得に餘裕を生ずるときは人は新に僕婢を

雇ひ若しくは其數を増さんとし、又手工業者その業務用の資本に餘裕を生せば當然その餘裕を以て一二人の職人を雇はんとすべし。而して所得及び資本の増加は即ち國富の増加に外ならざるを以て賃銀に依りて生活するものに對する需要は當然國富の増加と共に増加すと謂へり。(Wealth of Nations Cannan ed. Vol. I pp. 7071) 此一段の説明を讀めるものは Smith が念頭に置くところの決して近世工場労働者に非ずして Marx の所謂マファクツウル(手工業工場制)よりも更に古き手工業者なることを認むべし。機械採用の労働需要に及ぼす影響の論せらるゝことなきは固より當然のみ。(Ed. Bernstein, Zur Theorie und Geschichte des Sozialismus 1904. I. Teil S. 18 ff) 後に資本論に入りて Smith は流動資本と固定資本とを區別し、或一節に於ては「労働の原料と賃銀とを供給して産業(Industry)を活動せしむるものは流動資本なる」事を謂へりと雖も、全篇を通觀すれば、彼れは固定流動兩資本を一括して、單に一國産業(生産的労働)を活動せしめ、産業の大小を決するものは資本量なりと云ふを常とし、例へば「國の資本が依然として同一なるときは労働に對する需要も同じく同一又は甚だ同一に近かるべし」(p. 435)「産業の量は……各國に於

て之を雇傭する資本(stock)の増加と共に増加す」(p. 250)「社會の産業はその資本の増加に比例してのみ増加することを得」(p. 423)「社會内に於て現に雇傭せらるゝ有益労働の量の増加は全然之を雇傭する資本の増加に倚賴せざるを得ず」(p. vol. II, 175)と謂へるなり。

然るに十八世紀末並に十九世紀始の英國に於ては、穀物價格騰貴の爲めに世の注意は一般生産物と資本とに集中せずして、穀作農業家の食物と資本とに集中せらるゝに至れり。然るに穀作農業家の資本は國の全資本よりも Adam Smith の所謂流動資本を以て成る事多きを常とし、且つ農業家が以て業務を開始すべき貨幣資本の多くは賃銀に投せられたるを以て、是等の事實に基づき此時代の經濟學者等は、流動資本を以て「資本」の最重要なる部分と見なし、「労働維持の爲めの基金」を以て殆ど唯一の流動資本構成分子と見なすに至れり。固定資本は往々全く忘却せられて「資本」は労働維持の基金のみを指すの稱となり、機械は別範疇に置かるゝの甚しきに至れり。縱令 Ricardo が其 Principles 第一版の序文に「……労働機械及び資本」と記せるは過失に過ぎずとするも、猶ほ以て當時の風潮一端を窺はしむるも

のとなすべし。(Cannan, Theories etc. p. 112)此間にありて注意を労働維持基金の外に猶ほ資本の存すること、並に雇傭せらるゝ労働量は全資本の大小によらずして此基金の大小のみに倚ることに促がざらざらるゝものは、下院の救貧法調査委員会の報告(一八一七年)にして其一節は、幾許の人が労働に雇傭せられ得るか、は、絶對的に労働雇傭に適用せらるべき基金額にのみ由りて定まる。此等の基金が如何なる方法に適用支出せらるべしとするも、之に依て維持せらるゝ労働量は第一次に於ては殆ど同一なるべし。是等基金の全部又は一部を強制的に投用することの直接の結果は、用法を改むるにありて其量額を變ずる事にあらず。法律規定によりて投用せらるゝ部分は、若し其資金にして原所有者の分配に委せられたらんに必ず或他の目的に充用せられたるならん。故に法律により労働窮民として維持せらるゝものは、皆な然らざるときは窮民に與へらるゝ資金を其自家の労働によりて獲得したるべき或る他の人々に代りて維持せらるゝのみ。」と云へるなり。Barton は此報告に暗指を得たるものなりと云ふ。(Cannan, pp. 113-4)

Barton は労働に對する需要は流動資本の増減のみに由りて左右せらるゝものなるを以て、資本の増加は必しも同一比例に於て對労働需要を増加せしめず、甚しきに至りては資本の増加あるも労働に對する需要は全然増加せざる事あり得べきを指示せるなり。曰く、資本の蓄積は毎時必ずしも労働の増加量を動かすものにあらざるが如し。姑らく一例を假想せん。一製造業者ありて一千磅の資本を有し、之を二十人の織物工維持の用に充て、毎年一人に五十磅を支給す。今此人の資本は突然二千磅に増加したりとせよ。然れども彼は二倍の資力を以て労働者の二倍數を雇傭することなく、千五百磅を能く五人の人をして前に二十人が爲せると同量の作業を行ふことを得しむる機械の据付に支出す。然かする時は、製造業者が其資本を増加せるの結果十五人は解傭せられざるか。——然れども機械の建造及び修繕は多數の労働者を雇傭せざるか。そは疑なし。此場合千五百磅が支出せられたるを以てそは一年各五十磅を以て三十人の人に職を與へたりと假想することを得べし。假に十五年の使用に堪ふるものとすれば、機械は之より短命なること稀なり、三十人の労働者は常に十五人の製造業者に此機械を供給することを得べく、從て各製造家は絶えず二人を雇傭するものと云ふことを得べし。

し。また一人は常に必要なる修理の爲めに雇傭せらるゝものと想像せよ。然る時は吾人は前に二十人の織物工を有したるところに五人の織物工と三人の機械製作者とを有するなり。縱令製造家の所得が百磅より二百磅に増加せる爲め新に二人の僕婢を雇ふと假定するも猶ほ前の二十人の織物工に對し僅かに總計十人の雇傭せらるゝに過ぎざるなり。故に「勞働に對する需要は流動資本の増加によりて、固定資本の増加に由らず。此二種の資本間の比例が眞に有ゆるとき有ゆる國に於て同一ならば、其場合には當然雇傭を得たる勞働者の數は國の富裕に比例すべし。然れども斯る状態は蓋然の觀なし。技術進歩し文明普及するに従ひ固定資本は流動資本に對して益々大なる比例を占む。英産綿紗^{モスリン}一片の生産上に使用せらるゝ固定資本額は、印度綿紗の同量の生産上に使用せらるゝものより少くも百倍、恐らくは一千倍大なるべく、使用せらるゝ流動資本の比例は、百分又は一千分一なるべし。一定事情の下に於て勤勉なる一國民の年貯蓄が全部固定資本に加へらるゝ事あるべきは容易に想像せらる。此場合に於ては貯蓄は勞働に對する需要増進の上に何等の効果を有せざるべし」と。(pp. 15, 16) Ricardo は是に對

して、資本の増加が全然勞働に對する需要の増加を伴ふことなき場合に至つては想像し易からず。明言し得るところは需要の増加の減少比例に於て行はるゝと云ふに止まると謂ふと雖も、猶ほ固定増額の勞働階級に及ぼす影響に關する Bar-^{fon}の說を以て正鵠を得たるものとなし。右の論文の「價值ある報導を含めること多大なることを認めたり」。(p. 480)

(六)

抑も資本中勞働力雇傭に充てらるゝ部分と然らざるものとを分ち、資本蓄積の行程上に於ける二者の比例の變化が勞働者の境遇に及ぼす影響を論ずること最詳密にして、現社會に於ける勞働者の位置の不安を資本の蓄積中に伴ふ勞働雇傭に充てらるゝ資本部分の比例的減少に歸したるものは Marx が資本論第一卷第三章「資本的蓄積の一般法則」中に述ぶところの説なり。Marx は資本を勞働力の價值即ち賃銀總額即ち可變資本と生産用具の價值即ち不變資本とに分ち、技術的必要によりて決せらるゝ此二者の組合せを稱して資本の「有機的組織」 Organische Zusammensetzung des Kapitals と云へり。若し資本の有機的組織が不變なるときは勞

働に對する需要は資本の増殖と共に増進して、賃銀を騰貴せしめ、賃銀の騰貴はその「生産行程」の資本的特性を危う「せざる限り行はれ得べし。たゞ賃銀の騰貴、即ち利潤の削減或程度に達するときは、利潤の刺激鈍りて資本の蓄積は或は遅緩となり或は減退するを以て労働者に對する需要從て減退し、賃銀は「再び資本の利殖慾に適應する水準まで下降す」。然るに Marx に從へば資本の蓄積と共にその「有機的組織」は變じて資本中の可變部分は不變部分に對して相對的に減少す。蓋し資本家は市場に於て競争する爲には其商品を低廉ならしめざる可からず。而して此事は他の事情にして變らざる限り労働生産力の増進によりてのみ行はる。然るに労働生産力の増進は其條件並に結果として不變資本部分の相對的增加を意味するを以てなり。即ち労働生産力を増進せしむる爲には資本中の前よりも大なる部分を機械建物其他の設備に投ずるを要し、又労働生産力増進すれば原料の消費増加するを以て不變部分の占むる比率増大す。「資本の益々大なる部分が生産要具に、益々小なる部分が労働力に變形せられ、生産用具の結集及びその技術的作用の程度と共にそれが労働者、雇傭、手段たるの程度は減少す」。此形勢は資本の集

中行はるゝと共に益々促進せられ、資本が現組織の儘増大する「休息期間」は益々短縮せられ、益々多くの労働者は不用となりて釋放せらる。資本はその増殖によりて今日吸收せる増加労働力を明日衝離す。「此の全資本の生長と共に促進せられ、而して其自身の生長よりも速かに促進せらるゝその可變部分の相對的減少は、他面に於ては反對に可變資本若しくは労働者雇傭資料のそれよりも一層速かなる労働人口の絶對的增加と見ゆ。然れども事實は却て資本的蓄積がその勢力及び程度に應じて、絶えず相對的なる、即ち資本の普通利殖慾に對しては過大なる、從て過剰なる労働人口を産出するにあり。此過程は必しも有ゆる産業に於て同時同程度に行はるゝものにあらず。或産業に於ては資本の單純なる産中の結果資本の絶對量増加せずして單に其組織のみ變化し、又或は資本の絶對的增加と可變部分の絶對的減少とが相伴ふとあり。更に又資本が暫らく其組織を變へずして膨脹し、從て之に比例して追加労働を吸引しつゝ忽ちにして其組織を變へて可變部分を小にするとあり。何れにもせよ、有ゆる産業に於て可變資本部分また從て雇傭労働者の増加は激しき動搖及び一時的過剰人口産出と相結べり。たゞその既

備労働者の解雇なる顯著の形を以てするか、或は追加労働者の就職難なる比較的
隠黙の形を以て現はるゝかの別あるのみ。而して此の如き資本の労働者吞吐は
現在資本量及び其増加の程度生産規模の擴大、富源の増大と共に益々其程度を進
む。即ち労働者は労働者自ら造るところの資本の蓄積と共に彼等自ら己れを相
對的に過剰ならしむる手段を産出するものなり。(Das Kapital I, Volksausgabe S. 548-578)

Marxと説を同うする Engels の謂ふところも亦同じ。試みに之を引用せんか、曰
く、各資本家は没落の刑を免れんが爲めには益々その機械を改良せざる可からず。
然れども機械の完成とは人間労働の無用化の義なり。機械の採用増加が手工勞
働者幾百万人の少數機械労働者の爲め排除せらるゝ事を意味すとせば、機械の完
成は機械労働者自ら益々排除せられて、究極資本の平均的雇傭欲望を超過する可
用賃銀労働者數の産出を意味す。これ予が一八四五年に名づけたるが如く完全
なる産業豫備軍にして、工業が繁忙を極むる時の豫備となり、必然之に次ぐ瓦落の
爲めに路頭に放出せられ、又常住不斷資本との生存闘争に於て労働者階級の足の
鉛錘となり、賃銀を抑壓して之を資本的必要に適應する低率を保たしむる爲めの

調節者となるものなり。於此機械が Marx の語を藉れば、資本の労働者階級に對す
る最有力の戦闘手段となり、労働用具は絶えず労働者の手より食物を掠取し、労働
者自身の生産物が化して労働者抑壓の用具となるの事あり」と。(Dührings Umwälzung
der Wissenschaft, X. Aufl. S. 294-5)

(七)

右述の如き Marx の見地よりすれば Barton-Ricardo の機械論は固より不充分なりと
雖もまた大に取るべきところあり。Marx は Ricardo の機械論の章を以て、此人と俗
悪經濟學者とを本質的に區別する此人の善意を證明するものとなせり。(Theorien
über den Mehrwert II. Bd. 2. Teil 344-5) Ricardo が機械使用の總生産額を減少せしむる
ことあり得べきが故に労働者の爲めに不利なるべしと謂へるは Marx の默過せ
ざるところにして、總生産物は同一なるか、或は増加する場合に於ても猶ほ労働者
の過剰となることあり得べきことを力説したれども (S. 352-363) Ricardo が「資本家
並び地主の富を増進せしむる原因が『過剰人口を産出し得る』事、從て人口過剰が殖
富行程其者及び之を左右する生産力發達の結果なること」を承認したるを正論と

なし(S. 357)又労働に對する需要の機械の發達に比例して増加せざることを謂ふに止めずして、機械其者が人口過剰を生ぜしむること明言したるを以てRicardoがBarton 以上に重要な一步を進めたるものとなせり(S. 373)。たゞ Barton 並にRicardoが固定資本と流動資本とを分ち労働に對する需要が後者に由て決せらるゝものとなせるは非なりと謂ふ。蓋し流動資本中の原料補助材料は機械と等しく労働力とは交換せられず、非生産階級の所得に入る消費財を以て構成せらるゝ商品資本亦然るを以てなり。即ち Marx は流通行程上の見地に由る固定資本と流動資本の區別を排して、直接生産行程より生ずる對労働力關係に基づける可變資本不變資本の區別を取るものなり。Fr. Oppenheimer が Smith, Ricardo, Marx 三者の賃銀基金説の骨子を表はさんとせる左の方式は一目此三者の特色を知らしむるの便あるべし。

$$1. \text{ Die Smithsche Formel: } L = \frac{k}{p}$$

$$2. \text{ Die Ricardosche (Bartonsche) Formel: } L = \frac{k-f}{p} = \frac{z}{p}$$

$$3. \text{ Die Marxsche Formel: } L = \frac{k-f-r}{p} = \frac{v}{p}$$

備考。Lは賃銀、kは資本、pは人口、fは固定資本、zは流動資本、rは原料補助材料、vは可變資本を示す。(Theorie der reinen und der politischen Oekonomie II. Aufl. 1911 S. 663)

(八)

最後に一言すべきをRicardoの機械論と其自然的賃銀論の基礎をなせる人口原則との關係とす。Marxが上述の蓄積行程上に於ける資本組織變化の説よりして得たる結論はMalthus人口原則の否認なり。彼れは前記資本蓄積法則を述べたる後に記して、特定の歴史的生産方法は各々其特有なる、其時代に限りて眞なる人口法則を有するものにして、資本的生産方法に特有なる人口法則は是なり。絶對的なる人口法則は未だ歴史上人類が干渉せざる限りの動植物に取りてのみ存すと謂へり(Kapital S. 569)。然るに Ricardo は正にMarxの否認せるMalthusを奉ずるものにして、生活に餘裕ある限り人口は増加するの傾向あるを以て労働者の賃銀は到底久しきに亘りて其慣習的生活費以上に止まること能はずと謂ひ、克己に由る

増殖制限を以て、労働者階級の境遇を改むる爲め僅かに存する一方法として例へば「貧民の安樂幸福は、その數の増加を調節し、彼等の間に於ける不謹慎なる早婚を少くする爲め彼等自身の側に於ける若干の顧慮及び政府の側に於ける多少の努力なくしては永久に之れを確保すること能はず」と(Hobbes)云へり。然れども今彼れが機械論中述ぶるところより推究すれば、人口の制限に基づく賃銀の騰貴は流動資本の化して固定資本(機械)となることを促進し、從て人爲的に人口過剰を創造すべし。此過剰は食料の不足に由らず、労働者雇傭資料の不足の爲めに生ずるものなり。故に既に機械に關する舊説を改めたる上は人口増加の抑制は労働者境遇改良の爲めに寸效なきことを認めざる可からず。人口制限によりて纔かに實現し得べき賃銀の騰貴は、機械の採用によりて人口過剰を生ぜしむべき原因たるなり(Theorien über den Mehrwert II. Bd. 2 Teil S. 373)。Marxに在りては資本の組織變化に由りて生ずる相對的人口過剰の説はMalthus人口原則の虛妄を明にし労働者階級の貧困地位の不安は決して其の永劫不可變の運命にあらずして、僅かに資本的生産方法に伴ふ一時の現象に過ぎず、從て此生産方法の改められたる曉には復た

人口過剰の憂あることなきを論證するものなるを以て、Marx及び其の學徒は恐らく民衆境遇の前途を樂觀すべき理由を茲に求むることを得たるならんと雖も、Ricardoに取りては人口原則は恒久不變の自然法則にして、現社會組織は唯一の可能なる自然的社會形態なりしを以て其機械論は僅かに存したる労働者境遇改良の一途を塞ぐに終るべく。既に充分陰鬱なりしRicardoの經濟學説は其機械論一章を得てその陰鬱の度を更に大に濃くするものと云はざる可からず。(完)